

発掘現場から⑧

門前第2遺跡出土の人骨

門前第2遺跡の発掘調査は1月末で終了しましたが、室町時代〜江戸時代（今から500〜200年ほど前）にかけてのお墓が約200基も発見され、山陰地方でも例のない墓の多さとなりました。

お墓からは、たいへん多くのものが見つかりました。焼き物、お金、金属製品、木製品、そして人骨などです。

これらの遺物の中でもっとも多いのが人骨で、実に120体もありました。ただ、頭から指の先まですべてが残っているものは約3割で、大半は体の一部がなくなっていたり、ほんの一部だけという状態でした。やはり土の中に長くあったため風化していった結果と考えられます。



写真1 頭蓋骨の接合風景

発掘では骨が出てきた墓は慎重に（いろいろな意味で恐る恐る）、骨がよく見えるように掘っていきます。それから出てきた状態を写真と図面をとり記録することによってその骨が、どのような形で葬られたのかがわかります。

鎌倉時代（今から800年ほど前）までは、身体を伸ばし寝た状態で葬られるのが一般的でしたが、それ以降は深い穴にあぐらをかいたり、ひざを立てて座った形で葬られていました。

寝た状態であれば腐っていてもそれ以上骨は動きませんが、座っているために腐ると体が倒れ、掘り出したときにはかなり骨がバラバラになっていきます。そのため取り上げる時には、骨のどの部分がどこから出るか図面を見て確認しながら行います。

この作業はわれわれではなかなか難しいので、骨の専門家である鳥取大学医学部教授井上貴央さん、同助手川久保善智さんにお願いをしました。

こうして取り上げた骨のうち比較的硬い腕や足は折れていますが、頭の骨など薄いものはバラバラになっていることがほとんどです。これらを持ち帰り、きれいに土を落としたあと、元の形に復元する作業を行います（写真1）。この作業は土器の破片をつけていくこととまっ



写真2 復元された頭蓋骨

たく同じですが、どの破片が頭のどの部分なのかは、やはり専門家でなければわかりません。現在この作業を井上先生の研究室の方々に行っていたので、どんなもとの姿に戻ってきています（写真2）。土器などと違い骨は非常に残りにくいものです。そのため、今回多くのものが見つかったことは貴重な発見となりました。骨を詳しく調べることで、その人の年齢・性別・身長、女性であれば出産経験の有無、当時の埋葬習慣や生活のことなど、多くの情報が引き出せます。これからそうした研究を行っていくことにしています。